

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

30

ジョイス

ダブリンの市民 高松雄一訳

若い芸術家の肖像 高松雄一訳

中央公論社

ジョイス

訳者 高松 雄一
永川 玲二

This edition bears the following credit
“Illustrations by Robin Jacques. Reproduced
by Permission of Jonathan Cape Limited,
London”.

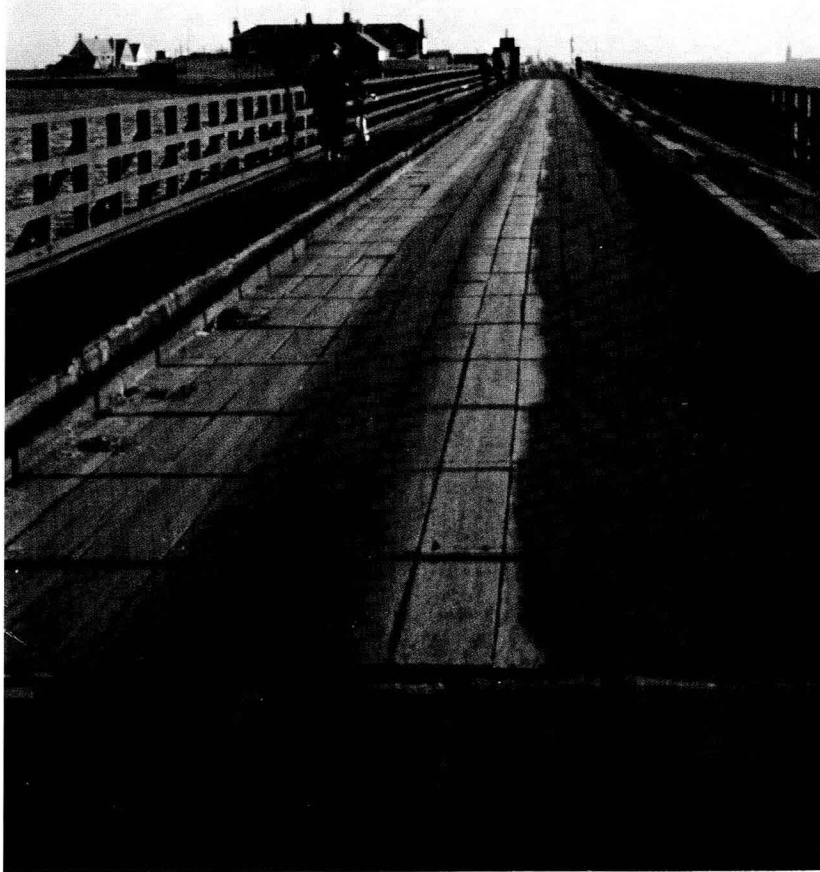
昭和47年1月20日初版印刷
昭和47年1月29日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34



ノースブルへ通ずる木の橋 「ドリーマウントまでくると彼は海への道を取り、
やがて薄い木の橋をわたる……」 ノースブルに渡った『若い芸術家の肖像』の主
人公スティーヴンは流れに立つ少女の姿に美の啓示をうける。(撮影・大沢正佳)



ジョイス

目次

ダブリンの市民

3

若い芸術家の肖像

197

解説

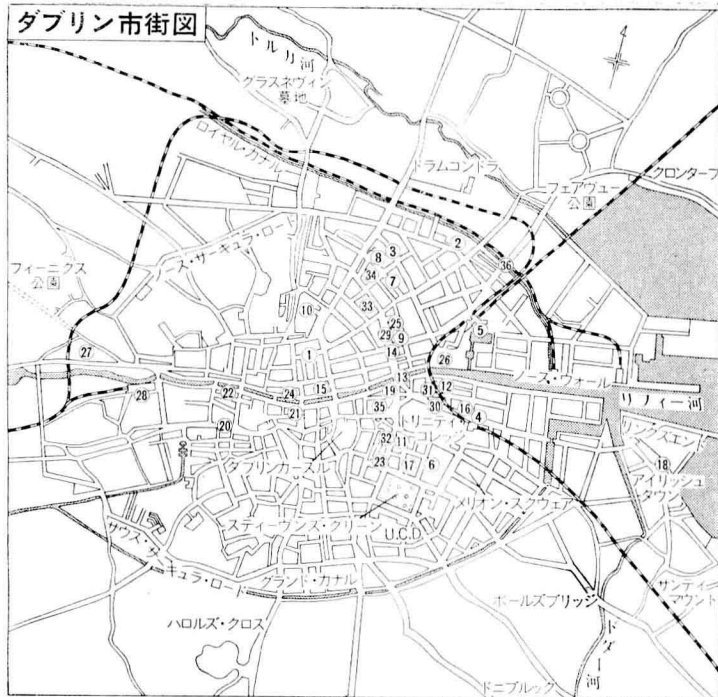
432

年譜

454

ダブリンの市民

ダブリン市街図



- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| ① リトル・ブリテン・ストリート | ①⑨ バラスト・オフィス |
| ② ノース・リッチモンド・ストリート | ②⑩ トマス・ストリート |
| ③ ガーディナー・ストリート | ②⑪ アダム・アンド・イヴ教会 |
| ④ ウェストランド・ロウ駅 | ②⑫ アシャー・アイランド |
| ⑤ エミアンズ・ストリート駅 | ②⑬ ゲイティエ劇場 |
| ⑥ キルデア・ストリート | ②⑭ フォー・コート |
| ⑦ テンブル・ストリート | ②⑮ グレシャム・ホテル |
| ⑧ 聖ジョージ教会 | ②⑯ カスタム・ハウス |
| ⑨ プロ・キャセドラル | ②⑰ ウェリントン記念碑 |
| ⑩ キングス・インズ | ②⑱ キングスブリッジ駅 |
| ⑪ デューク・ストリート | ②⑲ サックヴィル・ストリート(オコネル・ストリート) |
| ⑫ プールベック・ストリート | ③① クイーンズ劇場 |
| ⑬ オコネル橋 | ③② ロイヤル劇場 |
| ⑭ ネルソン記念碑 | ③③ クラフトン・ストリート |
| ⑮ オーモンド河岸 | ③④ ラトランド・スクウェア(バーネル・スクウェア) |
| ⑯ エインセント・コンサート・ルーム | ③⑤ ペルヴェディア・コレッジ |
| ⑰ マンション・ハウス | ③⑥ アイルランド銀行 |
| ⑱ 海の星教会 | ③⑦ ニュー・コメン橋 |

姊妹

こんどはあのひとも助かるまい。三度目の発作だから
ぼくは毎晩あの家のそばを通って（休暇ちゆうだった）
明かりのともっている四角形の窓を眺めた。毎晩おなじ
ように、むらのない薄い光が窓を照らしていた。あのひ
とが死ねば暗いブラインドに蠟燭の燈影がうつるはずだ、
とぼくは思った。死人の枕もとに二本の蠟燭を立てるき
まりを知っていたから。あのひととはよくぼくに言ったも
のだ、《わしももう長いことはなかるう》と。ぼくは繰
り言だと思っていた。ほんとうだったのをいまになって
知った。毎夜、ぼくは窓を見あげながら《中風》とい
う言葉をそっとつぶやいてみた。いつもはこの言葉が不思
議な響きをつたえてくれたものだ。幾何の教科書の《ノ
ウモン》（平行四辺形の一角からその相
反角を取り去った残りの部分）とか、公教要理（カトリ
教会における公的）の《聖職売買罪》とかいう言葉とおなじよ
うに。しかし、いまはそれが何か邪惡な罪深いものの名

前のように聞こえる。ぼくはぞっとしてちぢみあがったけれど、それでもそばにいつてそいつの恐ろしい仕事ぶりを見たいと思った。

夕食をとりにしたにおりると、コターじいさんが暖炉のそばに坐つてパイプをふかしていた。おばがぼくの粥をよそっていると彼は話をもとにもどすような口調で言つた。

——いや、何もほんものというわけじゃないがね……ただどうも妙なところがある……どうも薄気味わるいところがあるよ、あの男には。わしの考えを言えばだ……。

彼はパイプをふかしはじめた。わしの考えとやらをまとめているにちがいない。こうるさい老いぼれの馬鹿め！ はじめて知りあったころは、下等アルコールとか蒸溜器の螺旋管などの話をしてくれるなかなか面白い男だった。しかし、ぼくはやがてこの男にも、ウィスキー工場の長つたらしい話にもあきた。

——わしはこういう説をたてているのさ、と彼は言った。つまりあれは例の……変人どものひとりだね……。

どう言えいいかな……。

彼は自説を述べずに、またパイプをふかしはじめた。おじはぼくが見つめているのを見て言った。

——じつはね、おまえの親友が亡くなったのだよ。悲しからうな。

——だれが？ とぼくは言った。

——フリン神父がさ。

——死んだの？

——たったいまこのミスタ・コターから聞いたところだ。家のそばを通ってきたそうだよ。

ぼくはみんなが見つめているのを知っていたから、この知らせには興味が無いふりをして食事を続けた。おじがコターじいさんに説明した。

——この子とあのひとは大の仲よしだったのですね。

あのじいさんがこれにいろいろと教えてくれたのさ。ひどくこいつに目をかけてくれたそうさ。

——あのひとの魂に神さまのお恵みがありますように、とおばがつつましく言った。

コターじいさんはしばらくぼくを見つめていた。ちいさいまるい黒い目がじろじろ見ているのは知っていたけれど、彼の気がすむように皿から顔をあげてやったりはしなかった。彼はまたパイプをふかし、それから炉のなかにべつと唾をはいした。

——わしの子供らには、と彼は言った。ああいう男とあまりつきあってもraitたくないね。

——どういうことですか、ミスタ・コター、とおばがたずねた。

——どういうって、とコターじいさんは言った。つまり子供にわるいってことですよ。わしの考えを言えばだ、若いのはおなじ年頃の若い連中といっしょに遊んでりやいいので、ああいう……そうだよな、ジャック？

——わたしもその主義だ、とおじが言った。若いものは若いものらしくしてもらいたいね。この薔薇十字会員（神秘主義の秘密結社会員。鍊（金術、長命術などを探究した））めにはつねづね言いよかせているのさ、鍛練せにゃいかんとな。わたしががきのころには毎朝冷水浴をしたものだよ、冬も夏もな。おかげでこうやってびんびんしていられる。教育つてのはそりや結構しごくなものではあろうがね……。ミスタ・コターにあの羊の臘肉（臘肉）を一口たべてもらおうよ、と彼はおばに言いそえた。

——いやいや、おかまいなく、とコターじいさんが言った。

おばは蠅帳から皿を取りだしてテーブルにおいた。
——でも、なぜ子供によくないってお考えですか、ミスタ・コター、と彼女は言った。

——わしがわるいというのはね、とコターじいさんが言った。子供の心がひどく感じやすいからですよ。子供

がああいうものを見ると、ねえ、影響を受けるものでね……。

ぼくは怒りの言葉がとびだすのを怖れて口のなかに粥をつめこんだ。こうるさい赤っ鼻のうすのろじいめ！
ぼくが眠りについたのは夜も遅くなってからだ。コタ―じいさんに子供だと言われたのには憤慨したけれども、彼が言いかけた言葉から意味を引きだすのに頭をひねったのだ。部屋の中の暗がりのなかで、またあの中風の病人の重くらしい灰いろの顔を見たような気がした。毛布をひつかぶってクリスマスのことを考えようとしてみたが、灰いろの顔はなおもつきまとい、ぶつぶつとつぶやいた。何かを告白したがっているのだ。ぼくは自分の魂がどこかの邪悪な楽しい国へ沈んでいくのを感じた。そこでもあれが待ちかまえていた。それはつぶやき声でよくに告解をはじめた。なぜしょっちゅう微笑を浮かべているのだろう、なぜ唇があんなに睡で濡れているのだろうとぼくはいぶかしく思ったが、やがてそれが中風で死んだことを思いだした。ぼくは自分もまた弱々しい微笑を浮かべているのを感じた。まるで聖職売買者に罪の消滅を申しわたしているかのように。

翌朝、朝食のあとで、ぼくはグレイト・ブリテン通り（実際の名はリトル・ブリテン通り。子供（の思い）がいをそのまま記述している）のちいさな家を見にで

かけた。《服地屋》というあいまいな名前の登記がしてあるつましい店だ。商品はおもに婦人用の深靴と傘で、ふだんは《傘はりかえ》という札が窓にさがっている。いまは鎧戸がしまっているで札は見えない。ドアのノッカーには黒絹の花輪がリボンでゆわえてある。貧しい身なりの二人の女と電報配達少年が、黒絹にピンで留めたカードを読んでいる。ぼくもそばにいつて読んだ。

一八九五年七月一日

ジェイムズ・フリン師（ミース通り聖カタリナ教会元司祭）、享年六十五歳

安らかに眠りたまえ

ぼくはカードを読んであのひとが死んだことを納得した。そして足がすくむのに気がついて当惑した。もし死んでいなければ、ぼくは店の奥の暗い小部屋にはいつてゆく。あのひとはすっぽりと外套にうずまって、暖炉のそばの安楽椅子に坐っているだろう。おぼはきつとハイ・トウスト（喫煙草の商標）の一箱を持たせてよこしたろう。この贈物があのひとをうつけたうたたねから目覚めさせたらう。包みをあけてあの黒い喫煙草入れにいれるのはいつもぼくの役目だ。あのひとの手はひどくふるえる

から自分で煙草をいれようものなら半分は床にこぼしてしまふ。ぶるぶるふるえる大きな手を鼻にもっていくだけで、指のあいだから煙草の粉のちいさな塊りがこぼれ落ちて上衣の胸にふりかかる。彼の古ぼけた僧服が褪せて緑いろにみえるのは、嗅ぎ煙草の粉がしょっちゅう降っていたせいかもしれない。あのひとは赤い——だが、いつも一週間分の煙草のしみで黒ずんでいる——ハンカチで落ちた粉をはらいおとそうとするのだが、なんの役にもたたなかった。

なかにはいつてあのひとを見たいと思ったけれどドアをたたき勇氣はなかった。ぼくはそこをはなれて、目のあたっている通りの片側をのろのろと歩きながら、店のウインドウにはってある芝居の広告をかたづけしから読んでいった。ぼくも今日という日も喪に服する気分になっていないのが妙だと思った。内心、解放感を覚えていられださえた。まるであのひとが死んだために何かから解放されたみたいだ。ぼくはいぶかしく思った。昨晩おじが言ったように、ずいぶんたくさんのことを教えてもらったのだから。ローマにあるアイルランド神学校で学んだので、ラテン語の正しい発音を教えてくれた。地下墓地とかナポレオン・ボナパルトの話も聞かせてくれたし、ミサのさまざまな儀式の意味や司祭が着るいろいろ

るな祭服の意味も説明してくれた。時には、これこれの場合には何をなすべきやとか、これこれの罪は大罪なりや小罪なりや、それともただの短所なりやとかいうむずかしい質問をして悦にいった。それまではまったく単純な規則だと思っていた教会の諸制度がどんなに複雑で神秘的なものであるかを、これらの質問は教えてくれた。

聖体とか告解席の秘密保持などに対する司祭の責任があまりにも重大に思えたので、よくもそんな責任をひかぶる勇氣がでるものだとはびっくりしたくらいだ。神父たちはこういう複雑な問題をことごとく解明するために《郵便局用住所録》みたいにあつくて、新聞の訴訟告示欄のようにぎっしり活字のつまっている本をいくつも書いたのだと聞いても驚きはしなかった。これを考えるとよく何も答えられなくなったり、馬鹿げきった筋のおおらないことを言ったりした。そうすると、あのひとは微笑して二、三度うなずいてみせたものだ。時には前もって暗記させておいたミサの答辞をしやべらせることもあった。早口に暗誦してみせると、あのひとは物思わしげに微笑し、うなずき、時おり嗅ぎ煙草をたぷりつまんで順ぐりに左右の鼻孔に押しこんだ。微笑するときには、色褪せた大きな歯をむきだして下唇に舌をのせた——近づきになったばかりでよく知らない頃には、この癖を見

ると不安な気持がしたものだ。

ぼくは日ざしのなかを歩きながらコターじいさんの言葉を思いだし、あれから夢のなかでおこったことを思いだそうとした。長いビロードのカーテンと古風な吊りランプを見た覚えがある。とても遠いところにいたようなどこかの異様な風俗の国にいたような気がする——ペルシャだ、とぼくは思ったけれど……。だが夢の結末は思ひだせなかった。

夕方、おぼとぼくは喪の家をたずねた。もう夕日は落ちていたが、西むきの家々の窓ガラスには大きな金茶いろの層雲の輝きがうつっていた。ナニーがホール（入口の）でぼくらを迎えた。大声で話しかけるのはみつともないから、おぼはだまって彼女の手をにぎった。老婆は問いかけるようにうえのほうを指さし、おぼがうなずくと先に立ってせまい階段をよじのぼりはじめた。うなだれた頭は手摺のうえに出ないほど低かった。彼女は最初の踊り場でたちどまると、あけ放したままになっている死者の部屋のドアのほうへぼくらを励ますように手でうながした。おぼはなかにはいった。ぼくがためらっているのを見ると、老婆はふたたび手でうながしはじめた。

ぼくは忍び足でなかにはいった。部屋にはブラインドのレースの縁を通して、夕闇の金いろの光があふれてい

た。その光のなかでは蠟燭が青白い弱い焰のようにみえた。あのひとは棺に納められていた。ナニーがまず手本を示したので、ぼくたち三人はベッドの足もとにひざまずいた。ぼくは祈るふりをしたけれど、老婆のつぶやきが気になって考えがまとまらなかった。彼女のスカートがうしろで無様なホック留めになっていることや、布製の靴の片側だけがすりへっていることに目がいった。老司祭は棺のなかに横たわって微笑しているような気がした。

だがそうではなかった。立ってベッドの枕もとにいくと微笑していないのがわかった。おごそかに、どっしりと、祭壇に立つときの祭服を着て、大きな手に聖杯をゆるくささえて、あのひとは横たわっていた。大がらな灰いろの顔はひどく猛々しかった。黒い洞穴のような鼻孔が見えた。とぼしい白い柔毛（なげ）が顔を取り巻いていた。部屋には重い匂いがたちこめていた——花だ。

ぼくたちは十字を切ってそばをはなれた。階下の小部屋にはいると、身なりをととのえたイライザがあひとの安楽椅子に腰かけていた。ぼくは隅っこにあるいつもの椅子のほうへおずおずと足を運んだ。ナニーは食器棚にいてシェリーの壺（ぶ）といくつかのワイングラスをとりだすと、テーブルにおき、一口いかがとすすめた。それ

から姉の言いつけどおりにシェリーをグラスにつき、ほか

くたちに手渡した。彼女にクリームいりクラッカーも取りなさいとすめられたけれど、たべると大きな音をたてると思ったのでこわった。彼女はこわられてすこしがっかりしたらしい。そつとソファのほうへいって姉のうしろに腰をおろした。だれも口をきかなかつた。ぼくらはみんな火の気のない暖炉をみつめていた。

おばはイライザが溜息をつくまで待つて、それから口を切った。

——まあね、とにかく、あのひとはもったいないところにいらしたんだから。

イライザはふたたび溜息をつき、同意のしるしに頭をさげた。おばはワイングラスの柄をいじってからすこしすすった。

——あのひとは……お楽に？ と彼女はたずねた。

——はい、それはもう楽にまいりました、奥さま、とイライザが言った。いつ息をひきとったのかわからないほどでしたもの。きれいな臨終でございましたよ、ありがたいことに。

——それで、もうすっかり？

——火曜日にオラーク神父さまが来てくださって、終油をほどこしたり、心構えをさせたり、何やかやしてく

ださいましたわ。

——では、ご存じだったのね？

——さとりきつておりました。

——さとりきつたお顔つきですもの、とおばが言った。湯灌^{ゆかん}にやとった女の人もそう言っておりました。

まるで眠っているようだ、ほんとにおだやかでさとりきつた顔つきだつて。あんなにきれいな死顔になるとはとも思えませんでしたわ。

——ほんとうにねえ、とおばが言った。

彼女はまたすこしグラスの酒をすすつてから言った。

——でもね、ミス・フリン、いづれにしろ、あなたがたはできるだけのことをしてあげたんですもの、そう考えればずいぶん気が休まるはずですわ。お二人ともほんとうに親切につくしましたものねえ。

イライザは膝のうえの服の皺をのばした。

——ああ、かわいそうなジェイムズ！ と彼女は言った。そりゃ貧乏なりにできるだけのことはいたしましたです——生きているうちは不自由な思いをさせたくありませんでしたもの。

ナニーはソファの枕に頭をもたせていた。眠りかけているらしい。

——ナニーもかわいそうに、とイライザが彼女を見や

りながら言った。疲れきっているんですよ。これとわたしとで何もかもやらなければなりませんでね。湯灌の女の人をやって、納棺の支度をして、お棺にいて、礼拝堂でミサをあげる手はずをつけて。オラーク神父さまがおられなかったらいいたいどうになりましたやら。礼拝堂からあの花や二本の燭台を持ってきてくださったり、《フリーマンズ・ジェネラル》(ダブリンの朝刊紙『フリーマンズ・ジャーナル』の言いちがえ)にのせる通知を書いてくださったり、そのうえ墓地とかジェイムズの保険なんかの書類も全部とりしきってくださいましたよ。

——ずいぶんよくしてくださいだったのね、とおばが言った。

イライザは目を閉じてゆっくりと首をふった。

——昔なじみにまさる友なしですよ、と彼女は言った。——なんと言っても信用できるのは昔なじみだけですもの。

——ほんとうにそうね、とおばが言った。あのひとは天国にいらしたんだからあなたがたを忘れはしますまい。あなたがたに世話になったことも。

——ああ、かわいそうなジェイムズ！ とイライザが言った。手間なんぞべつにかかりませんでしたよ。これまでだって物音ひとつ聞こえないくらいでしたもの。でも逝っちゃったってことはわかりますねえ、やつぱ

り……。

——さびしくなるのは何もかもおわたたあとなのよ、とおばが言った。

——それはわかつております、とイライザが言った。もうビーフ・ティー(病人用の牛)をもっていくこともないし、あなただって、奥さま、嗅ぎ煙草をとどけてくださることもないし。ああ、かわいそうなジェイムズ！

彼女は過去を思いかえすように言葉を切り、それから分別くさい口調で言った。

——じつはね、このごろどうも様子がおかしいとは思っております。スूपを持っていくと、いつも聖務日課書を床に落つことしたまま椅子にもたれて、口をあけているものですから。

彼女は指で鼻をおさえて顔をしかめてみせた。それから言葉を続けた。

——だけど、しょっちゅう言い暮らしておりますよ、アイリッシュタウンのわたしらみんなが生まれた昔の家をもう一度見たいから、夏のうちに日和を見て馬車でいってみよう、わたしとナニーもつれていこうって。オラーク神父さまに聞いた音のしない新式馬車というのが——^{リイ・マティン}痛氣いりの車輪(空気がいり「ニュー・マティン」の言いちがえ)とやらがついてあるあれですよ——通りのむこうのジョニー・ラッシュ

の店で一日だけ安く借りられるものなら、日曜日の夕方に三人でいっしょに出かけようって言いましてね。すっかりその気になっていたのに。……かわいそうに！

——あのひとの魂に神さまのお恵みがありますように！とおばが言った。

イライザはハンカチを取りだして目をぬぐうとまたポケットにもどして、しばらく無言のまま火のない炉格子を見つめた。

——いつでもあんまりきちうめ凡帳面すぎるものだから、と彼女は言った。司祭のお勤めが重荷になりましてね。それから、まあ言ってみれば一生をだめにしたんですよ。

——そうね、とおばが言った。不遇な人でしたわね。それはよくわかりましたよ。

ちいさな部屋に沈黙がゆきわたった。ぼくはそのすきにテーブルへいってシェリーを飲み、それから隅っこの椅子にそつともどった。イライザは深い物思いにふけっているらしい。ぼくらは彼女が沈黙を破るのをうやうやしく待っていた。彼女は長い間をおいてからのろのろと言った。

——あの聖杯（ミサ聖祭のときに葡萄酒をいれる）をこわしたのがね……。あれがはじまりなんです。いえ、べつになんでもなかったというんですよ。つまり、なかには何もはいいないな

かったそうですから。それでもねえ、やはり……。子供（侍祭を勤める少年を指す）のまちがいったっていうんですけど。でも、ジェイムズはひどく気に病みましてね。神さまがお恵みくださいますように！

——そうでしたの？とおばは言った。ちらとは聞いていたけれど……。

イライザがうなずいた。

——あれが脳にわるかったんです、と彼女は言った。あれからふさぎだしましてね、だれとも口をきかずに、ひとりであらうつきまわって。それで、ある晩、お勤めに出てくれというのにどこにも見あたりませんでねえ。隅から隅まで探しましたけれど影も見えませんのです。そこで書記さんが礼拝堂を見てはどうかと言いましたね。鍵を出して、礼拝堂をあけて、書記さんとオラーク神父さまと、もうひとりそこにいあわせた司祭さまが燈をもつて探しにはいりましたっけ……。なんとまあ、そこにおりましたですよ。告解室の暗がりにはぼつとりと坐って、大きな目をあけて、くすくすひとり笑いをしておりました。

彼女は耳をすますようにふいに言葉を切った。ぼくも耳をすました。だが家のなかには物音ひとつ聞こえなかった。それでぼくは知った。老司祭はさっき見たとおり、